「男、突っ走る！」

第114回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（25）　『オフィスツリーイン』代表

弘田　洸（24）　『スリジェネアカデミー』歌唱講師

辻松　翔（12）　『スリジェネ』メンバー

石田　琴音（11）　『スリジェネ』メンバー

横田　玲央（24）　大学院生

一村　日向（21）　大学生

田代　美紀（16）　ヒロイン役の女優

新川　友里恵（22）　共演女優

1　名古屋美術大学・駐車場

雅也の運転する車が入ってくる。

N「映画企画の話が始まってしばらくしてから、僕は、横田監督から、オーディションの前に一度お会いしたいと連絡をいただき、キャンパスを訪れました」

雅也が車から降りてくると、ドアの前で洸が立っている。

雅也「洸先生」

洸「ああ、うっちー」

雅也「洸先生も、横田監督に呼ばれたの？」

洸「そう。オーディションの前に、話があるって言われて」

雅也「俺も」

洸「何だろうね？」

雅也「さあ」

と、ドアが開き、大学院生・横田玲央（24）と、大学生・一村日向（21）が出てくる。

横田「木内さんと弘田さんですね。映画企画

で、監督を務める横田玲央です」
日向「助監督を務めます、一村日向です」
横田「さあ、どうぞお入りください」

2　同・映像編集室

雅也、洸、横田、日向が話している。
横田「この度は、映画制作に参加していただき、ありがとうございます」
雅也「いえ。横田監督のお話は、ヤマさんから伺ったことがあったんです。これまで、いくつもの自主映画やミュージックビデオの監督をされて、自主映画にはヤマさんや、元『スリジェネ』メンバーのコウタも出演したと聞いたことがありました。なので、今回この話を聞いたときは、『スリジェネ』としては光栄な話だと思ってたんです」
横田「恐縮です。今、僕は大学院生なんですが、来年の三月で卒業になります。それで、今回の映画制作は僕の卒業制作にもなるんです。なので、じっくりと時間をかけて作

っていきたいと思っています」
洸「それで、僕たちに事前に話しておきたいことがあるっていうのは……？」
横田「（日向に）企画書、お渡しして」
日向「はい。（と資料を雅也と洸に渡して）こちらが、今回の映画の企画書になります」
横田「ストーリーとしては、ある一人の青年の青春の憂いを描こうと思っています」
雅也「青年の憂い……」
洸「メンバー的に、翔かりゅーたかな」
雅也「けど、あの子たちまだ小学生でしょ」
洸「あ、そっか」
横田「それで、ぜひ主人公には、木内さんにお願いしたいと思っています」
雅也「（唖然と）……え？　僕ですか？」
横田「それで、この主人公の人生に関わっていく親友役を弘田さんに演じていただきたいと」
洸「ほお……」
雅也「あの監督、恥ずかしい話、僕は仕事で

脚本を書いたり自主制作映画の現場に携われていただいたことはあるんですけど、映像での演技経験は全くないんです。『スリジェネ』は、コロナ前の二年間はずっと演劇やミュージカルばかりやってきましたから」

横田「変に芝居をする必要はありません。木内さんの自然体を、撮れたらと思っています。もちろん、弘田さんも」

洸「なるほど……」

横田「オーディションは、あくまで主人公以外のキャストを決めるために行うんです。メインどころは、僕のイメージにあった方をキャスティングしようと思っていました。ちょうど国枝さんから、『スリジェネ』さんの資料をいただいたときに、お二人のことを知りまして、それで不躾ながら、一度お会いして、今回の話をさせていただこうと」

雅也「……」

洸「国枝さんが、企画に参加するように進めてきたのは、そういうことだったんだ」
雅也「けど、僕なんかで本当によろしいんですか？　横井監督の卒業制作で、主人公が僕の映画なんて、これコケませんか？」
横田「（苦笑して）そんなことはありませんよ。今日こうしてお会いして、主人公のイメージは木内さんしかいないと思いました」
雅也「そうですか……」
横田「国枝さんにも、了承を得てますから」
雅也「え、国枝さんからもですか？」
洸「この間の会議の時、何も言ってなかったよね」
雅也「何にも聞いてない」
横田「是非お二人に演じていただければと。よろしくお願いします」
顔を見合わせる雅也と洸。

3　同・駐車場

雅也と洸が、車の前で話している。

洸「やったじゃん、うっちー。主役なんて」
雅也「いくら国枝さんから了承得てるって言ってても、横田監督の作品の主演なんて、重責過ぎるわ」
洸「お互い、チョイ役で十分って話してたのにね。まさか主人公と、その親友役になるなんて思わなかった」
雅也「クランクインは、九月のシルバーウィーク初日って言ったでしょ。それまで、いろいろ頑張ろう」
洸「回想シーンで、高校生の役やるって言ってたもんね。うっちー、監督に勧められた化粧導入液、買うの？」
雅也「もちろん。化粧水と乳液はもう持ってるから良いんだけど、導入液は知らなかったからね。主役なんて、もう二度とないかもしれない。一世一代のチャンスだと思って、全力でやるわ。洸先生も、髪型金髪にしなきゃいけないけど、大丈夫？」
洸「髪染めるのには慣れてるから。ただ、金

髪はこれまでやったことなかったけど」
雅也「クランクインまで、まずは役作りに励みますか」

4　木内家・雅也の部屋

雅也がプリンターの前に立っている―
―印刷物が何枚も出てくる。
N「それからしばらくして、横田監督から台本のデータが送られてきました」
雅也、椅子に座って台本を読み始める。
雅也「（唖然と）え……」
N「僕は台本を読んで驚愕しました。映画の尺は何と五十分分前後想定で、シーンは三十八場面あり、そのうち僕が出演する該当シーンは全部で三十七シーンもあったのです。つまり、ほぼ五十分分僕は出ずっぱりということになります」

5　同場所（夜）

雅也が台本を読みながら、セリフを覚

えている。

N「また、横田監督の脚本は日常会話の中で哲学的なセリフを入れるシーンが多く、クランクインまでの約二ヶ月、仕事の合間に台本とにらめっこする日々が続きました」

6　公園（二ヶ月後）

雅也、横田、日向、その他スタッフたちが撮影機材を持って歩いている。

N「そして二ヶ月後、九月のシルバーウィーク初日。映画のクランクインとなりました」

×　×　×

撮影用カメラが設置されている。

雅也、ヒロイン役の女優・田代美紀（16）、横田、日向、スタッフたちが集まっている。

横田「では本日クランクインになります。主演のレイ役、木内雅也さんです」

拍手をする一同。

雅也「よろしくお願いします」

横田「ヒロインのミユ役、田代美紀さんです」
拍手をする一同。
美紀「よろしくお願いします」
×　×　×
スタンバイをしている美紀――カメラの後ろで見ている横田、日向、スタッフたち。
横田「ではシーン五、テイク一いきます。よーい、スタート」
と、カチンコを鳴らす日向――遠くでスタンバイをしていた雅也が歩いてやってくる。
美紀に気づくと小走りになって、美紀のもとへやってくる。
雅也「お待たせ。行こう」
美紀「うん」
横田「カット」
と、カチンコを鳴らす日向。
横田「木内さん、そんなに声大きくなくて大丈夫です。マイクが拾ってますから」

雅也「大きかったですか？」
横田「はい。ボソッともう少し呟く感じでお願いします」
雅也「分かりました」
横田「ではもう一度行きます」
と、それぞれスタンバイ位置に戻る雅也と美紀。
横田「シーン五、テイク二いきます。よーい、スタート」
と、カチンコを鳴らす日向。
N「やはり演劇と映像は違うということを、初日から実感しました」

7　道

制服姿の雅也と洸が歩きながら演技をしている――後ろ歩きをしながら撮影をしているスタッフと、それに着いていく横田と日向。
N「午後からは洸先生も合流し、回想シーンとなる高校生の役を演じました」

8　ビジネスホテル・全景（夜）

9　同・一室

台本を読んでいる雅也。

N「シルバーウィークの四日間、早朝の撮影のために自宅から名古屋を往復するのはしんどかったため、名古屋駅近くの格安のビジネスホテルで宿泊することにしました。『スリジェネ』の創設からもう二年半近くが経過し、映画の主役というのは僕にとって新しい挑戦でした」

10　河川敷（翌日）

雅也と洸が休憩をしている。

少し離れたところで、日向やスタッフたちが機材のセッティングをしている。

その横で、翔と琴音がスタンバイをしており、横田が演技指導をしている。

N「翌日には、スリジェネアカデミーメンバ

ーの翔と琴音のシーンが撮影されました。三十八シーンの中で、この場面は唯一僕が登場しない幼少期の回想シーンであり、台本上はこの二人、僕とヒロインの美紀さんの小学生時代を演じてくれました」

11　ホテル・一室（翌）

カメラのセッティングをしている横田と日向――手伝っている雅也。

ベッドの中でセリフの確認をしている共演女優・新川友里恵（22　）。

N「さらに翌日には、本編の中で一番体を張るシーンを撮影することになりました。ヒロイン役の美紀さん同様、事務所に所属している新川友里恵さんとのシーンで、新川さんはこのシーンのみの出演でしたが、存在感のある演技を見せてくれました」

横田「新川さん、すいません、もう少し待っててください」

友里恵「大丈夫です」

日向「木内さんもすいません、お手伝いいただいて」

雅也「大丈夫です。スタッフワークも、これまでたくさんやってきましたから」

友里恵「木内さん、セリフのやり取りを練習させてもらっても良いですか？」

雅也「分かりました」

横田「後は俺たちで。木内さんは役者モードに入ってください」

雅也「はい」

と、友里恵の元に行くと、セリフ確認を始める。

N「このシーンは、ホテルの三時間という限られた時間の中で撮りきらなければいけなかったため、僕も新川さんも意識を集中して撮影に臨みました。翌日の撮影も、何とか無事に終わり、シルバーウィーク四日間の撮影は無事に終了しました」

12　木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている。

N「まだ撮り終えていないシーンがいくつかあり、それはスケジュール調整の上、改めて撮影することになりました」

13　同・表（一ヶ月後）

N「十月に入り二度の撮影を終えてすぐのこと……」

クレーン車が、プレハブ倉庫を吊るしている――その様子を見ている雅也。

作業服を着た人たちが、指示をしながらプレハブ倉庫を移動させている。

庭は基礎工事を終えて砂利で埋め着くされており、その上にゆっくりとプレハブ倉庫が設置される。

N「地元の知り合いの総合建築業の社長さんにお願いをし、ついにプレハブ倉庫を事務所として新設することにしたのです」

14　同・事務所

プレハブ倉庫内に、仕事用のデスク、
来客応対用のテーブルとイス、書類棚、
複合機等が設置されている。
デスクで仕事をしている雅也。
N「事務所という作業環境を整えたことで、
以前よりも仕事に集中できる環境を作ること
ができました。また、事務所オープンを
ＳＮＳで発信すると、いろいろな方からお
祝いのコメントはお花をいただき……」
来客応対用テーブルには、いくつもの
お祝いの花が置かれている。
その中の一つに『祝　事務所オープン
『スクエア・トラスト　代表取締役
安本真苗』というメッセージカードつ
きの花が置かれている。
N「学生時代、フリーペーパー『なご弁新聞』
を制作したときにお世話になった、『スク
エア・トラスト』の安本社長からもお花が
届きました」

15　高校・駐車場

雅也と洸の車から、それぞれ撮影機材を下ろしている雅也、洸、横田、日向、美紀、スタッフたち。

N「十一月のある日。この日は、洸先生がクランクアップする撮影日でもありました」

準備をしている一同――洸、スマホを見ると、

洸「ん……？　（と雅也に）うっちー、今日って誕生日？」

雅也「うん」

一同「え？」

洸「おめでとう」

雅也「ありがとう」

一同「おめでとうございます」

雅也「ありがとうございます。まさか、誕生日に撮影するとは思ってもみませんでした」

洸「今スマホ見たらさ、Facebook の通知で、『今日は木内雅也さんの誕生日です』って来たから」

雅也「ああ、なるほどね」
横田「すいません。大事なお誕生日に」
雅也「いえいえ。良い思い出になります」
日向「休憩の時、軽くお祝いしましょうか」
美紀「良いですね。撮影期間中に、出演者の誕生祝いするのも大事な仕事の一つですもんね」
洸「何で言わないんだよ」
雅也「何かを催促するみたいで、嫌じゃん」
洸「まあ、それもそうか」
笑い合う雅也と洸。

16　ラーメン屋（夜）
まぜそばを食べている雅也と洸。
雅也「洸先生、お疲れさまでした」
洸「いやいや。うっちーは、まだあともう一日撮影残ってるじゃん」
雅也「一月の四日だって。もっと寒くなってるだろうな」
洸「俺の登場シーンも結構あると思ってたけ

ど、うっちーはほぼずっと出てるもんな」
雅也「だって、三十八シーンあって、俺の出番三十七シーンだよ。香盤表、ほぼ全部に丸がついてるんだもん。ゾッとしたよ」
洸「うっちーと親友役やるなんてなぁ」
雅也「それにさ、『神様が願うまで』は、洸先生は神様の役で、俺はアンサンブルで、特に共演シーンなかったでしょ。だから、共演としては今回が初になるんだよね」
洸「そっか。普段アカデミーで一緒だから、共演してるとばっかり思ってた。楽しかったな、うっちーとの共演シーン」
雅也「俺も。アカデミーの子どもたちに、思い切り自慢してやろうと思ってる」
洸「あの子たち、今の俺の金髪の髪型見て、『ヒカリプリン』なんて呼んでるんだよ」
雅也「先生と思ってないね。リーダーの指導不足です。申し訳ございません」
洸「良いんだよ。『神様が願うまで』の共演者もいるから、どうしても俺のことを先生

とは見れないんだよ」
雅也「俺はメンバーだから、全然ラフに接してくれても良いけど、やっぱり洸先生は先生だからね。時と場所を考えないと」
洸「まあな」
雅也「住吉先生もね、レッスン中は『うっちー』って呼ぶけど、会議の時は『うっちーさん』って呼んでるからね」
洸「ああ、そういえば言ってるわ」
雅也「いずれ子どもたちにも、そういう時と場所を考えた話し方を教えないといけないかもね。行儀作法とか礼節礼儀が大事になってくる世界だから」
洸「良いと思う」
雅也「美味しいね、ここのまぜそば」
洸「だろ。一回来てみたいと思ってたんだよ」
雅也「これはハマリそう」
洸「あ、そうだ。はい、これ。うっちー」
と、袋に入ったコンビニのスイーツを渡す。

雅也「何これ？」
洸「コンビニで買ったスイーツ。こんなんで申し訳ないけど、誕プレだ」
雅也「ありがとう。美味しくいただきます」
笑顔で頷く洸。

17　木内家・事務所
雅也が、パソコンで仕事をしている。
N「洸先生がクランクアップして間もなく経った、十一月中旬のこと……」
雅也のスマホに着信が来る――雅也、画面を見ると、
雅也「レイコ姐さん……？　（と電話に出て）もしもし」
N「かつて『スリジェネ』の一期生として一緒に活躍したレイコ姐さんからの突然の連絡でした」

つづく